

本年度の振り返り

～教師自身がワクワク・ドキドキして取り組む教育実践にチャレンジを～

2018年度 3学期最終打合せにて

これまで、主体的・対話的で深い学びに向けて取り組んできました。子どもたちに聴き合う関係ができてきました。子どもたちのいい姿がたくさん見られるようになりました。先生方の指導のおかげです。ありがとうございました。

1 教師が変わる

人権同和教育で、「子どもを変えるには教師が変わらなければならない。教師が変わらなければ、子どもは変わらない。」とよく言われます。教師が変わるとは、教師の見方、捉え方、考え方を変えることであり、それに基づき指導方法を変えることです。また、子どもが言うこと聞かない、子どもに教師の指導が入らないというのは、子どもが悪いのではなく、指導が子どもに合わないからであると捉えてきました。二学期ごろから、子どもの姿がとても良くなってきました。子どもの姿が変わったのは、教師の指導方法が変わったからだと思います。すなわち、「学びの共同体」に学び、「主体的・対話的で深い学び」を追求してきたからだと思います。

2 聴き合う関係ができてきました

目指してきたのは、「主体的・対話的で深い学び」でした。具体的には、班やペアでの話し合いではなく、班やペアでの聴き合いでした。これにより、子どもたちに聴き合う関係ができてきました。友だちの考えを聞くという姿勢が生まれました。

3 困っている子から聞く

先生方の指導の基本姿勢に、「困っている子から聞く」ということも始まりました。分からないことを分からないと言える学級となってきたと思います。困っていること、分からないことをみんなで解決していくという方法は、友だちの困り所を聴くことから始まります。そして、その子が分かったかどうか、解決できたかどうかは、その子に聴くこととなります。こういったことも、聴き合う関係づくりに大きく貢献したと考えられます。

4 聴き合う関係づくり、困っている子から聞くことは、学校行事や学年行事、学年での取り組みでも

こういった班やペアでの話し合い、「困っている子から聞く」という指導は教科の授業だけではなく、学校行事や学年行事、学年での取り組みでも実践されていきました。学校生活全体で実践されていきました。

班やペアでの話し合いは、多くの場面で見てきましたが、特に印象に残った例としては、2年生のわくわくランドです。前に立った児童が、わくわくランドの振り返りをペアで行うよう指示した後、話し合った内容を全体で交流していました。2年生でも、やるんだ、できるんだと感心しました。（このとき、〇〇保育園の園児たちを招待していました。〇〇保育園の先生方がすごく成長した子どもの姿に感激してみえました。）もう一つは5年生のお別れ集会です。出し物の感想を、近くの子で話し合い、その中から良いものを拾って、全体に発表するといった実践をしていました。かなり高度な取り組みでした。

「困っている子から聞く」ことの例としては、4年生の社会見学では、要所要所で、教師から「何か質問はありませんか」ではなく、「何か困っている人はいませんか」という問いかけをしていました。

5 主体的・対話的な教育活動を推し進める

学校行事や学年行事、学年での取り組みで、子どもたちに任せるところが増えました。先生方が意図的にそのように指導していったのだと思います。6年生が中心となった人権集会、2年生わくわくランド、5年生が中心となったお別れ集会、お別れ集会での各学年の出し物の取り組み、4年生が中心となったお別れ式などです。子どもたちに任せることによって、活動が主体的・対話的に進んでいきました。私たちは、「主体的・対話的な教育活動」を数多く実践してきたのです。そうした中で、上の学年の良い姿を見た下の学年の子たちが、それにあこがれ、同じようにやりたいという思いが生まれていると思います。その例が、2年生わくわくランドでの姿であり、4年生のお別れ集会での姿だと捉えています。もしかすると、これらは先生方のチャレンジであったかもしれませぬ。

子どもたちは、おそらく、高学年になったら自分もあのようにしたい、あんな風になりたいと思っているでしょう

から、来年度以降も、教師の働きかけにより、主体的・対話的な活動が進んでいくと思っていますし、そうあってほしいと願っています。

6 教科の授業でも、子どもに任せる場面を多くしたい

様々な場面を子どもたちに任せることで、子どもたちは主体的・対話的に取り組みを進めていきました。教科の授業でも同様でありたいです。私たちは「主体的・対話的で深い学び」を追求しています。教科の授業においても、子どもたちに任せる場面をもっと多く持ちたいです。

実は、教育アドバイザーから、昨年度、何度となく、「まだまだ教師が教えている。もっともっと子どもたいに任せなくてはいけない。」「あそこで教師が答えを言ってしまった。解説してしまった。もっと子どもに任せれば良いのに…」ということをお聞きされています。教師は「どうしても教えたがる」、「すぐに教えたがる」という傾向があり、本校においても同様だということです。子どもに任せるとは、ペアや班で答えを確認しなさい、なぜそうなるのか説明をしなさいということのようです。そして、「困っている人はいませんか」と教師が問うのです。これにより誰一人として、分からない子をひとりぼっちにさせることはないと言っています。

今年度の後半になっても教育アドバイザーから同様の指摘がありました。学校全体としては指導方法が確定し実践が進んでいますが、個々においては、まだまだ実践できていない場面があるということです。やはり、現状に満足することなく、さらなる上を目指すことが重要です。飽くなき向上心、チャレンジ精神が必要です。

7 ねらいに沿っており、子どもたちが夢中になる学習課題の設定を

私たちが目指すところは、「主体的・対話的で深い学び」です。学校としての次の課題は、教科の授業における学習課題の設定です。学習が「深い学び」になるためには、単元や本時のねらいに沿ったもので、子どもたちが夢中になって取り組む学習課題が必要です。来年度の校内研修では、「深い学び」に向かう学習課題の設定をテーマの一つにしたいものです。うまくいった学習課題、うまくいかなかった学習課題、なぜうまくいったのか、なぜうまくいかなかったのか、次回実施するならば、どう変えるか等々、記録に残し、みんなで積み上げ共有したいものです。

8 ○○小学校の良き伝統

次に、○○小学校の良き伝統について考えます。

良き伝統:指導者や担当者が変わろうとも、同様の教育実践が行われたとき、相当の成果が上がっているもの
成果が上がる要因の一つは、下の学年の子が上の学年の子のいい姿を見て、自分たちも「あんなふうになりたい」と思っていることです。

① ○○小学校の伝統となっていること : 上の学年の子が下の学年の子に優しい。

なかよし班活動 / ○○っ子ラリー / お出かけピアサポート
運動会の組み体操(6年生から5年生へ)

② 伝統となりつつあること : 人権集会

③ 伝統としていただきたいこと

学校行事や学年行事・学年の取り組みが、主体的・対話的な活動になるよう導いていくこと。

5年生:お別れ集会 お別れ集会の各学年の出し物

4年生:お別れ式 2年生:わくわくランド、○○っ子郵便局 などなど

しかし、行事や教育実践をパターン化してしまうと、形骸化されてしまい、成果が上がらなくなるのではないかと心配があります。これを防ぐには、子どもの実態に応じた、これまでとは違った一工夫が必要であると考えます。そういった意味で4月にお話した「大きな行事は例年通り。その中に、創意工夫を盛り込みたい。教師自身がワクワク・ドキドキして取り組みたい。」というのは、的を射た内容であったと思っています。今年度、こういった実践が多くあったと思います。それ故に、子どもたちのよい姿がたくさん見られるようになり、大きく成長したと思っております。先生方のおかげです。本当にありがとうございました。

今後とも、教師自身がワクワク・ドキドキして取り組む教育実践にチャレンジしてほしいと願っています。